

心地よいスイングの中に、モダンでフレッシュな感覚をいっぱいに秘めた美しいピアノ・タッチを繰りひろげてみせるビル・チャーラップを中心にした“ニューヨーク・トリオ”が、コール・ポーターの作品ばかりをとりあげて演奏する。まさにヴィーナス・レコードならではの好企画であり、チャーラップのファンのみならず、すべてのジャズ・ピアノ・ファンにとっても待望の一枚ということができよう。このレーベルからは、すでに「夜のブルース」「過ぎし夏の思い出」「ラブ・ユー・マッドリー」「星へのきざし」などの“ニューヨーク・トリオ”のアルバムが世に送り出されてきた。そのいずれもがビル・チャーラップというピアニストのもっている、都会的でスマートなセンスがいかになく発揮された見事なものばかりだったが、そんなチャーラップにとってコール・ポーターの作品は、まさに打ってつけの素材なのだといってよい。

コール・ポーターはジョージ・ガーシュインやアーヴィング・バーリンなどと並んで、20世紀のアメリカを代表する最高のポピュラー音楽の作曲家のひとりに数えられる。ポーターは多くのミュージカル・ナンバーを世に送り出したが、彼はまさに汲めども尽きないメロディーの泉のような存在であり、ポーターの書くメロディーは、つぎつぎにジャズのスタンダード・ナンバーとしても定着していった。ポーターの作品はメロディーの素晴らしさとともに、ハーモニー(コード)進行もユニークなものが多かったので、ジャズ・プレイヤーが好んでとりあげていったのだろう。その作風は、どこまでも都会的で洗練されていて、響きはあくまでもスマートでゴージャス。裕福な家庭に生まれ、一流の大学を出たサラブレッドらしく、ポーターの作品には単に美しいだけでなく、すべての曲に高い品格のようなものがにじみ出ている。

またときおり顔をのぞかせる魅力的なエキゾチズムも、ポーターの作品を特徴づけるもののひとつになっている。ソング・ライターとして大成功をおさめたコール・ポーターは、後年は落馬事故から下半身の自由を失ってしまったが、彼の華麗な生涯は「昼も夜も」として映画化されただけでなく、近年の「五線譜のラヴ・レター」でも、生々しく描かれていた。そんな魅力をもっているコール・ポーターのメロディーだけに、いままで多くのジャズ・プレイヤーたちも好んでポーターの曲をレパートリーにとりあげており、エラ・フィッツジェラルドやチャーリー・パーカーをはじめ、これまでにポーター作品集を吹き込んだジャズメンというのも枚挙にいとまがない。ビル・チャーラップの“ニューヨーク・トリオ”による本アルバムも、まさに忘れがたいポーター集として、永く聴き継がれてゆくであろう充実した内容をもつ一枚。トリオの面々はコール・ポーターの音楽がもっている魅力的な側面を、あざやかに現代に蘇らせてみせている。

ところでコール・ポーターの都会的でスマートなセンスというのは、ビル・チャーラップの音楽にも相通じるものがある。1966年、ニューヨークに生まれたビル・チャーラップの父親はムース・チャーラップといて、「ピーターパン」の音楽をはじめとする映画やミュージカルのための仕事に携わっていた。そしてチャーラップの母親は、シンガーのサンディ・スチュアート。彼女はコロビックスに「マイ・カラリング・ブック」というアルバムを吹き込んでいたが、近年もビル・チャーラップのピアノだけをバックにスタンダード曲を歌ったアルバム「ラヴ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ」をブルーノートからリリースしたばかり。そこではチャーラップのピアノ伴奏もさることながら、たっぷり包み込んでゆくような、ふくよかな暖かさをもつ彼女のボーカ

Begin The Beguine

ピギン・ザ・ピギン

New York Trio

ニューヨークトリオ

- ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ**
You'd Be So Nice To Come Home To (8:03)

- マイ・ハート・ビロングス・トゥ・ダディ**
My Heart Belongs To Daddy (6:13)

- ソー・イン・ラブ**
So In Love (6:49)

- ピギン・ザ・ピギン**
Begin The Beguine (6:49)

- アイ・ラブ・パリ**
I Love Paris (6:31)

- フロム・ジス・モーメント・オン**
From This Moment On (6:55)

- ジャスト・ワン・オブ・ソーズ・シングス**
Just One Of Those Things (2:58)

- イー・ジー・トゥ・ラブ**
Easy To Love (6:19)

- エブリタイム・ウィ・セイ・グッバイ**
Every Time We Say Goodbye (6:42)

《 all songs : Cole Porter 》

ビル・チャーラップ Bill Charlap (piano)
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart (bass)
ビル・スチュワート Bill Stewart (drums)

録音：2005年8月23、24日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at The Studio in New York on August 23 & 24 , 2005.
Engineered by Katherine Miller.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover : © Frank Horvat / G. I. P.Tokyo.
Artist Photo : John Abbott. Designed by Taz.

ルが、とても素敵な雰囲気を感じ出していた。そんな両親の血を引くビル・チャーラップだけに、とくにスタンダード・ナンバーの演奏はお手のものであり、このアルバムでも素晴らしいセンスを発揮させている。もちろんチャーラップは、しばしばコール・ポーターのナンバーをとりあげて演奏してきているけれども、録音の上では彼が吹き込んだポーターの作品というのは、思ったより多くない。アルバムとしてはホーギー・カーマイケルやレナード・バーンスタイン、ジョージ・ガーシュインなどの作品集を吹き込んでいて、ヴィーナスからの「ラブ・ユー・マッドリー」もデューク・エリントンの楽曲ばかりをとりあげた作品だった。それだけに本コール・ポーター集は、まさに満を持して制作されたものと言えるだろう。

ベテラン・ベーシストのジェイ・レオンハートは、安定したサポートを聴かせるのみならず、自在にチャーラップに絡み、ときにはスリリングなカウンター・メロディーを弾き出してみせる。おなじみのメロディーをツッ・ビートで奏で、ソロに移るやフォー・ビートにスイッチしてゆくあたりのタイミングの巧さも、まさに絶妙。奇をてらわずに、しっかり存在感を主張してゆくあたりは、まさに名人の世界だと言ってよい。ドラムスのビル・スチュワートは、テナーのジョー・ロヴァーノやギタリスト、ジョン・スコフィールドなどとの共演でも知られる精鋭プレイヤー。多彩な個性をもった彼のドラミングによって、トリオの音楽に新鮮な魅力と、えも言えぬテンションがもたらされているのは聴き逃せないところである。

そんな“ニューヨーク・トリオ”によるコール・ポーター集とは、どのようなものだろう。ロマンティックな美しいポーターであるのはもちろんだが、それだけでなく、これはスリリングなポーター集であり、力強いポーター集でもある。そしてコール・ポーターという作曲家が

もっていた自由さや、お洒落な冒険心といったものまで、トリオのメンバーは鮮やかに引き出してみせている。メロディーの美しさに委ねるのではなく、“ニューヨーク・トリオ”ならではの個性が強く主張されている、骨太のピアノ・トリオ・アルバム。コール・ポーターの音楽が、ぐっとひと回り大きくなったような印象さえ受けるのである。

アルバムのオープニングは<ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ>。1942年のミュージカル映画「サムシング・トゥ・シャウト・アバウト」のために書かれたもので、数多いポーター・メロディーの中にあっても、とびきり高い人気をもっている一曲だ。まず無伴奏のピアノ・ソロによってテーマが奏でられたあと、メロディーの美しさを十分に生かきitta、小気味よいスイング・ブレイが繰りひろげられてゆく。細やかに手の込んだビートを送りだすビル・スチュワートのドラミングがチャーラップを刺激して、第一級のジャズとしてのスリルをもったブレイを耳にすることができる。<マイ・ハート・ビロングス・トゥ・ダディ>は、ミュージカル「リーブ・イット・トゥ・ミー」の中の一曲。強靱なベースのイントロに導かれて現われる愛らしいテーマもさることながら、ここでは後半を彩るジェイ・レオンハートのベース・ソロが圧巻。生々しい息づかいが感じられるブレイには、グルーブを支えてゆく屋台骨としての彼の存在感が、はっきり示されている。1948年の大ヒット・ミュージカル「キス・ミー・ケイト」の中の有名な<ソー・イン・ラブ>。もともとムーディでロマンティックな味わいをもったナンバーを、ダイナミックにスイングさせてゆくチャーラップのセンスが光っている。後半、ベースとドラムスによってチェイスを繰りひろげてゆくというアイディアも秀逸だ。

<ピギン・ザ・ピギン>は、1935年のミュージカル「ジュブリー」からの一曲で、エキゾチックな“ピギン”は民族リズムの一種。ここでは意表を衝いて、スローなピギンのリズムに乗せて演じられている。美しいコード・ハーモニーによって、もとのメロディーがもっている魅力的な個性がストレートに表現されてゆく。<アイ・ラブ・パリ>は、53年のミュージカル「カンカン」の主題歌である。独特の“間”を生かしたチャーラップの解釈。その“間”の中から、チャーラップならではのリズムックなスイング感が生み出されてくる。さりげない中に小粋なメロディック・センスが生かされた、美しい演奏になっている。<フロム・ジス・モーメント・オン>は、1950年のミュージカル「アウト・オブ・ジス・ワールド」からの一曲。ミディアム・テンポで心地よいスイングを聴かせるチャーラップのソロに、自在に絡みつくレオンハートのベース。そして終始ブラッシュを使って鮮やかなサポートをおこなうビル・スチュワートと、トリオの魅力がいかになく発揮されたトラックになっている。やはり「ジュブリー」の挿入歌だった<ジャスト・ワン・オブ・ソーズ・シングス>がピアノ・ソロで演じられたあと、ポーターのスマートさとジャズのスリルが巧みにミックスされた<イージー・トゥ・ラブ>へと移る。1936年のMGMミュージカル「踊るアメリカ艦隊」の挿入曲で、ポーターの作品の中でもとくに人気の高い一曲だ。<エブリタイム・ウィ・セイ・グッドバイ>は、44年のレビュー「セブン・ライプリー・アーツ」の中の作品。淡々と繰られる。耽美的とも呼べるチャーラップのピアノ・タッチの中に、優雅なポーターのスピリットが浮かんでは消えてゆくような美しい演奏で、アルバムは締めくくられる。

岡崎 正通 (http://www.bestjazz.jp)